

「出雲には独自の文化が繁栄」

増山雄三

「国生み」「黄泉国」「天岩戸」に続く、日本書紀の神代編にある四つ目の話は、島根の出雲地方に伝わっている、「素戔嗚命（スサノオノミコト）と八岐大蛇（ヤマタノオロチ）」という神話である。

この神話は、「天照大神の弟神である素戔嗚尊は、天上界で田や御殿を壊すなどの暴力を働いたので、怒った天照が天石窟に籠り、世界は闇に包まれた。神々は天照を天石窟から引きだし、素戔嗚尊を追放する。そして、出雲に下った素戔嗚は、土地の娘たちを生け贄として食べていた、八つの頭と尾を持つ巨大な蛇、八岐大蛇を切り刻んで倒し、助けた『奇稻田姫（クシイナダヒメ）』とめでたく結婚する」というものである。

スサノオによるヤマタノオロチ退治は古事

記にもあるが、日本書紀の「八岐大蛇」という表記が、古事記では「八俣遠呂智」とされていて、本文にも「高志之八俣遠呂智、年毎に来たり」とあって、大蛇は古代日本の地方である高志（こし）から来たとされるが、名称本来の意味は「山神または水神」であり、これを祀る民間信仰もある。

島根県出雲地方の南部は、中国山地の山々に抱かれ、のどかな農村風景が広がる場所だが、この地方最大の河川である、長さ百五十三^キ_ロの「斐伊川」の上流に位置している。

その一角である、同県雲南市の山あいには須我神社があり、その境内には「日本初之宮」という石碑を据えていて、NPO法人出雲学研究所副理事長で七十才になる本間恵美子さんは、「スサノオノミコトが、妻のクシイナダヒメと住んだ地として、日本書紀に出てくるへ出雲の清地」とは、ここだったと伝承されています」というが、石碑の文言は、地上で営まれた神々の住まいの嚆矢だった事を意

味している、と付け加えてくれた。

日本書紀の神話では、先に話した様に、スサノオは天上の田を壊すなどの乱暴な振舞で神々の怒りを買ひ、地上に追放され、出雲のへ簸（ひ）の川上へに降り立つが、それは斐伊川のほとりを指すといわれている。

そして、スサノオはそこで、若い娘を食べ、てしまう大蛇のヤマタノオロチにおびえる、老夫婦とその娘のクシイナダヒメと出会い、娘を救って結婚しようとは決心し、八つの頭と尾を持ち、赤い鬼灯のような眼をもったオロチを、八つの酒桶を準備して迎え討つ、ということになるのだ。

書記の本文では、「果して大蛇あり。酒を得るに及至り、頭各一の槽を飲み、酔ひて睡る。時に素戔鳴尊、乃ち帯かせる十握剣（とつか）のつるぎを抜き、寸に其の蛇を斬りたまふ」とあるが、つまりそれは、「はたして大蛇がやってきた。酒を見つけると頭を各々一つずつの酒桶に入れて飲み、酔って眠って

しまった。その時、素戔鳴尊は身に帯びてお
 られた十握剣を抜いて、ずたずたにその大蛇
 をお斬りになった」ということになる。
 スサノオがオロチを倒し、尾を切り裂いた
 ときひとふりの剣がでてきたが、それがいわ
 ゆるへ草薙剣と呼ばれるもので、その剣を
 天上の神に捧げ、クシイナダヒメと結ばれる
 が、スサノオはその時へや雲たつ出雲八重垣
 妻ごめに八重垣作るその八重垣ゑと歌
 うが、や雲たつとは、雲が盛んに湧くさまを
 表す枕詞で、妻とこもるために、幾重もの垣
 を作ったという祝歌だ。
 ところで、このように勇壮で、誇らしげな
 物語は、どんな背景から生まれたのかという
 事を、歴史学者の上田京大名誉教授は、著書
 の「出雲の神話」の中で、クシイナダヒメの
 名が、稻田のタマシイを示す事や、ヤマタノ
 オロチが住む、水面に映る空がうごめき大蛇
 の様に見える、斐伊川上流の「天が淵」が、
 しばしば氾濫した河川の神格化だと見られる

と述べ、続いてこう書く。

「妻ごもりの歓喜は、荒れくるう水を治めた古代人の勝利のことあげであり、春から秋にかけての生産の労苦のはてに、もたされたみのりの凱歌でもある」といい、それは、治水に苦勞した出雲の農耕生活に根ざした神話だったのである、と指摘している。

日本書紀は、天武天皇（六三一〜六八六）の命で編纂が始まり、七二〇年に成立したもののだが、大和で作られた史書に、古代出雲の風土に深く結び付いた記述が、どうしてこのように盛り込まれていたかという理由を、先の出雲学研究所の本間さんは、「日本書紀を読むと、天武天皇が壬申の乱で政權を握る際に、出雲臣伯という人物が活躍しています。そうした出雲系の有力者たちが大和にいて、出雲ではこんな話があると伝えたのではないでしようか」と推しはかる。

のちに、スサノオとヒメは「須我神社」に一緒に住み、二人の間には「大己貴神（オオ

アナムチノカミ」という子が生まれるが、
 このオオアナムチは、地上を天の神々に明け
 渡すという「国譲り」をするのだ。
 この筋立ては、出雲が大和に服従させられ
 た事を示すとも言われ、あるいはそうなのか
 も知れないが、古代出雲の自然と暮らしの原
 像は、このように神話に刻みこまれ、いつま
 でも消える事なく今に続いている。
 なお、スサノオによるヤマタノオロチ退治
 は、先述の如く古事記にもあり、この中で、
 オオアナムチがスサノオの六世孫である「大
 国主神（オオクニヌシノミコト）、別名Ⅱ大
 穴牟遲神、八千矛神」として登場し、そして
 彼が国譲りをするが、記紀神話では、出雲は
 大きな位置を占め、考古学でもその重要性や
 独自性が認められている。
 また、弥生時代の遺跡である出雲市の「神
 庭荒神谷遺跡」で、銅剣三百五十八本、雲南
 市の「加茂岩倉遺跡」では、銅鐸三十九個が
 見つかっているが、それらは何れも権威や富

を示す祭器で、一つの遺跡からの出土例では		全国でも最多で、方形の墳丘の四隅が、ヒト	デのように突き出しているスタイルで、墓が	造られているのが特徴でもある。	こうして大和の王権が伸長するなか、出雲	もその支配下に入ったが、古墳時代の六世紀	頃になると、地元で発掘された「砂鉄」を木	炭の火で製錬する、いわゆる「たたら製鉄」	が始まっていて、出雲近郷の山間部では、そ	れらの関連遺跡も数多く見つかっていて、こ	の製鉄法は近世まで盛んに行われ、それが現	在でも継承されている。	ちなみに、物理学者の寺田寅彦は、ヤマタ	ノオロチの正体は、溶岩流を連想させる、た	たら製鉄で炉から流れ出した「銑鉄」を表す	とし、スサノオがそれを討伐する話は、この	地を支配する豪族が、婚姻によって製鉄をす	る一族を支配下に治め、鉄剣を献上させたの	ではなからうか、と推定している。	令和二年八月
----------------------	--	----------------------	----------------------	-----------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	------------------	--------